



怖い人



川崎ゆきお

「今朝は集まりが悪いようですねえ」

「雨が降りそうだからでしょ」

「まだ、降ってませんよ」

「そのうち降るとか」

「天気予報だと、午後に雷雨があるかなしか程度です」

「あなた、天気予報を見て、ここに来ましたか」

「はい、朝は必ず見ます」

「まあ、いろいろ事情があるのでしょ。雨は降っていなくても、こんな曇天だと調子が悪い人もいますよ」

「そういえば客も普段より少ないですねえ」山田は喫茶店内を見渡す。

「自転車置き場を見ましたか」

ショッピングビルにある自転車置き場だ。

「半数以下です。いつもの」

「やはり雨の影響ですよ」

「降ってないのになあ」

と、山田は不満顔だ。

「山田さん」

「はい」

「あなた、この天気、気になりませんか」

「なりません」

「あ、そう」

「何か？」

「今朝は出たくないとか」

「ありません。あなたは？」

「私ですか。私は出ようかどうか迷いましたよ。雨が降る前の鬱陶しさがあるでしょ。頭が重い。これがやがて痛くなる。また、息苦しくなってくる。今朝はまだそこまで行ってませんが、やはり動くのが嫌になる。だからって、部屋の中でくすぶっていると、余計鬱陶しい。それに私はこの朝会の幹部ですからねえ。誰か顔を出していないとまずい。それでまあ、無理というわけではないが、一応使命感があるので、出て来たのですよ」

「僕は普通です」

「しかし、他の客を見て下さい。客の少なさは尋常ではない」

「空模様が、こんな影響をもたらすのでしょうか」

「もたらすねえ。それだけとは思えません」

「じゃ、他に何か理由でも」

「梅雨時の鬱陶しさだけじゃない現象かも」

「はあ？」

「今朝は出ては行けない日なのかもしれません」

「何ですか、それは」

「私はねえ。山田さん」

「はい、何でしょう」

「人の動きに敏感なんだ」

「はあ」

「この集まりだけじゃなく、一般の客も少ない。これは小動物が何かを警戒して、出たがらないのではないかと」

「いや、僕は小物ですが、小動物ではありません」

「普段の四分の一の出足です。客のね。おそらく外に出ている人も、そんな割合ではないかと思われる」

「何が言いたいのですか」

「これは異変の前触れかもしれませんよ」

「大雨が降るなんて、聞いてませんよ。予報でもやっていない」

「天地異変だけじゃないのですよ。山田さん」

「大地震でもない」と

「はい、今朝は何かややこしいことが起こっているのです」

「何が起こっているのですか」

「分かりません」

「はあ」

「我々には窺い知れない何かが動いているのでしょくなあ。目に見えない、または感じられないけど」

「何ですか、それは」

「この地上、天地、我々だけが住んでいるわけじゃない。動植物を含めてね」

「まさか異世界の」

「良いところを突きましたよ。山田さん」

「お盆なんて、地獄も休みらしいですし」

「我々が知っている世界など、ほんの僅かなのです。人間の頭で感知出来ることはね。感知出来ない世界もあるのですよ。山田さん」

「何を言い出すのですか」

「しかし、人には一寸した能力がありましてね。これが作動したのでしょうか。おそらく作動していることそのことも知らないでね。だから、出足が悪いのです。動きが鈍いのです。猫が静かにじっとしているようなものです」

「何が起こるのでしょうか」

「起こっても、分からないでしょう」

「あ、村中さんが来ました」

この話題は、ここで終わった。

山田は、この幹部、怖い人だと、そのとき思った。

了